

眠る

▷5◁

1月14日。横須賀市の石原直之さん(40)にとつて、第二の「誕生日」だ。04年のこの日、15年間の引きこもり生活に、ピリオドを打った。

引きこもるようになったのは、大学4年生のころ。休学と留年を重ね、24歳になっていた。学生生活になじめなかった上、就職活動で「自分探し」に迷い込んだ。

バブル景気に沸き、企業の「青田買い」が盛んだった。求人情報は段ボール1箱分も届いた。だが、体が動かない。やりたい仕事も、人生の目標もない。

「ノルマがきつい。第一志望じゃなかったし」。ひと足早く社会に出た友人は、つまらなそうに愚痴をこぼした。ラッシュの電車に揺られるサラリーマンは疲れ果てているように映った。社会人になることが、漠然と怖かった。一度もリクルートスーツを着ることなく、終わった。

卒業はしたものの、「一人になりたい」と、自ら人間関係を切った。

会社員の父と民生委員の母の3人暮らし。月に1万円の小遣いをもらって生活に甘んじた。3畳の洋

部屋の扉を開いて

室で、ベッドにもたれてテレビゲームに熱中。運動不足で10kg以上体重が増えた。太陽の光を浴びることがつらくなった。眠っていれば、現実の自分と向き合わずにすむ。毎晩、父と晩酌し、部屋にもウイスキーを

持ち込んだ。気絶したように眠り、15時間は布団にいた。「明日なんて来なければいい」と思い続けた。

8年目。ようやく外出できるようになったが、中古のソフトを買いに行くほか、小遣いの使い道も

15年間の孤独に終止符

人の女性に恋をした。

彼女とのチャットで「親切だから、好き」と言われ、15年間で唯一、他人に感情を動かした。自分を知って欲しい。うそをつきたくない。考え抜いた末、最も口にしにくい言葉で、自分をさらけ出した。

引きこもりなんだ

拒絶を覚悟で、キーボードをたたいた。

そうなんだあ。カウンセリングしようか？

返事に心が浮き立った。思いを告白したが、今度は「ネットの出会いには信じられない」。失恋はこたえた。誰か、生身の人間に支えて欲しい。何の予定もなく空白だ

社会的引きこもり 「様々な要因によって社会参加の場面が

狭まり、就労や就学など自宅以外での生活の場が長期に失われている状態(精神疾患を除く)。」と定義され、全国で100万人前後いると推定される。厚生労働省が行った全国調査では、02年の県内の保健所への相談件数は1448件(電話と来所)。東京都に次ぎ、2番目に多かった。

県は04年4月、「どこへ相談に行けばいいのかわからない」といった当事者側の要望を受け、引きこもり支援策として、総合窓口「青少年サポートプラザ」を横須賀市西区に設置。相談とNPOのネットワーク形成の支援に力を注いでいる。

ったカレンダーに「保健所に行く」と書き込んだ。

04年1月14日。息を吸い、同市保健所のカウンターに立った。「引きこもりの相談にきました」

た。人との会話が怖いこと、自信がないこと。延々と40分。保健師の目を見て話す自分に、驚いた。

この日を境に、カレンダーにとんとん予定を書き込んだ。やりたかった水泳と手話を始め、バイトを見つけた。ほどよい疲れから、酒に頼ることもなく、布団に入るとすぐに眠る。朝7時には、すっきり目覚める。

「40歳、無職」。この現実には不安はある。だが、再び引きこもりたくはない。15年間、孤独だった。1人では生きていけないと気が付かれた。

「人とつながっていることが、うれしい」。誰かと待ち合わせる。胸が高鳴る。そんな今の自分が、気に入っている。

(高木智子)



「遠回りしたけど、ようやく社会に出るスタート地点に立ちました」。雑踏の中で語る石原さん＝横浜市西区で